第4章

失われた連帯の痕跡を求めて

――植民地期コートジボワールにおける独立運動とイスラーム――

佐藤　章

はじめに

ヨーロッパ列強による19世紀末からの「アフリカ分割」の結果，463万平方キロメートルにも及ぶ西アフリカの広大な土地がフランスの支配下に入った。フランスはこの領土を複数の植民地からなる植民地連邦のかたちで統治した。この植民地連邦をフランス領西アフリカ（Afrique occidentale francaise: AOF）という（図4-1参照）。AOFを構成する植民地の数は，1904年のAOF創設以来，時代とともに変遷したが，1948年に8つに定まった。8植民地とは，モーリタニア，セネガル，フランス領スーダン（現マリ），オートボルタ（現ブルキナファソ），ニジェール，ギニア，コートジボワール，ダホメ（現ベナン）である。これら8植民地はこのときの領土をそのまま引き継ぐかたちで，1960年にそれぞれ独立国となった。

AOFにおける独立運動においてムスリムが果たした役割は，ムスリムが人口上の多数派であった植民地については明確に指摘されてきた。フランス領スーダンでは，既存の有力者である首長層を独立運動に動員するうえでイスラームの紐帯が重要な役割を果たしたことが知られる（Thompson and Adloff 1957）。セネガルでは，後発の政党が当初有力だった政党を凌駕していくうえで，大票田の地域に強い影響力をもつイスラームの教団からの支持が大きな鍵となり，ギニアでも，支配的な政党の党勢拡大を堅固に支えた要因として，イスラームを不可欠の文化的要素とする主要民族の結束があったことが指摘されている（Schachter-

図4-1　AOFの版図

(出所)筆者作成

Morgenthau 1964)。このほかモーリタニアとニジェールでもムスリム人口は圧倒的な多数にあり，必然的に独立運動の中心を担うことになった。

他方，同じAOFでも，ムスリムが人口上の少数派である植民地については，独立運動におけるムスリムの役割に関してあまり明確な位置づけがなされてきていない。これに該当する植民地はコートジボワール，オートボルタ，ダホメであるが，そのなかでもコートジボワールがそのような研究状況になっていることは，AOFにおける独立運動の理解に関わる比較的大きな問題を提起するといえる。

その問題とはアフリカ民主連合（Rassemblement démocratique africain: RDA）という政治組織とイスラームの関係をめぐるものである。RDAは，AOF

のアフリカ人の植民地横断的な連帯を目指す運動として1946年に組織された。その地方支部にあたる各植民地レベルでの政党がフランス領スーダン，ギニア，コートジボワールで成功を収め，それぞれ独立時の政権を担う政党となった。RDAは，ムスリムのなかでもとりわけ，中東やエジプトなどで進んだイスラーム復興運動の考えに共鳴する人々――当時のAOFの文脈では改革派（reformistes）と呼称される――の支持を獲得したことが指摘されてきた（Kaba 1974; 1987; Cruise O'Brien 1986）。これはムスリム人口の多いフランス領スーダンとギニアに関してとくにいわれてきたことである。

だが，RDAが成功を収めたもうひとつの植民地であるコートジボワールについては，改革派ムスリムの貢献について主要な文献にはほとんど具体的な記述をみつけることができない（Schachter-Morgenthau 1964; Zolberg 1969; de Benoist 1982; Fofana 2007）。実はコートジボワールは，RDA創設の中心人物でリーダーとして運動を牽引したF・ウフェ＝ボワニ（Félix Houphouët-Boigny）の出身地でもあった。つまり，RDAの重要拠点であったコートジボワールに関して，RDAと改革派ムスリムの関係のあり方が精査されてこなかったということである。コートジボワールにおいて改革派ムスリムとRDAはどのような関係にあったかをあきらかにする作業が求められている。この作業はRDAとムスリムの関係をめぐる理解を深めることに寄与するであろう。

さらにこの理解は，AOFの政治史におけるイスラームの役割についての歴史的パースペクティブを構築するうえでも重要なものとなろう。序論でも述べたとおり，サハラ以南アフリカのなかで西アフリカはムスリムの人口比率が相対的に高い地域であるが，独立後の政治におけるイスラームの影響力は顕著に強いというわけではない。そのことについて序論では，ムスリムが政治から一定の距離をとってきたことの帰結ではないかと指摘したが，本章での考察はそのような距離感がどのようにできあがってきたのかについて，歴史の具体的なエピソードを通して垣間見ようとするものである。その知見は，イスラーム主義武装勢力の活動が広く観察されるようになっている西アフリカの旧フランス領諸国の今後の動向を見据える際に，イスラームと政治の間に取り結ばれてきた歴史的関係についての示唆を得る手がかりとなろう。

以上の課題に対し，本章はフランスの植民地当局が残した行政文書の分析を通

してアプローチしたい。ここで注目するのは，コートジボワール内陸部の重要都市ブアケ（Bouaké）で1950年代前半に起こったモスクのイマームの人選をめぐる係争である。ブアケでの係争に関しては先行研究での簡単な紹介（Miran 2006; Hanretta 2009）があるのみで，詳細は具体的に伝えられてこなかった。本章はフランス国立海外公文書館（Archives nationales d'Outre-Mer: ANOM）が収蔵するこの係争に関する史料を検討し，ブアケの係争が，RDAのメンバー，ブアケのムスリム，植民地当局，ウフェ＝ボワニ本人らが関与した複雑な構図のもとで展開されたことをあきらかにする。

本稿の構成は以下のとおりである。まず，イスラームと植民地統治に焦点を絞り，独立運動が展開された時期のAOFの状況を確認したい（第1節）。次いで，RDAと改革派ムスリムの関係が，独立運動期の10数年あまりの間に親密な連帯から崩壊へと変遷したことを確認する（第2節）。これらの作業を踏まえ，史料の検討を行う（第3，4節）。この検討を通して，コートジボワールにおけるRDAと改革派ムスリムの関係がけっして単純なものではなく，いくつかの矛盾をはらんだ緊張感を伴うものであったことをあきらかにしたい。

1 AOFにおける独立運動の地域的文脈

AOFの版図においては，北部がサハラ砂漠であり，南に行くほど徐々に降水量が増えてサバンナ帯へと遷移し，ギニア湾沿岸部では熱帯雨林帯となる。歴史的にみて西アフリカのイスラームは，11世紀頃から伝播が始まったのち，北部の乾燥帯・半乾燥帯に拠点を置いて栄えたマリ帝国（最盛期は14世紀）やソンガイ帝国（最盛期は16世紀）などのもとで普及した。これらの内陸の拠点から南部の熱帯雨林帯に向けて，金やコーラの実などを求める交易網が歴史的に維持されてきており，この交易網に沿ってムスリムが徐々に南部に移住し，定着する動きが，数百年にわたる過程のなかでゆるやかに進展した。19世紀末にフランスの植民地支配が始まったのちには，沿岸部の拠点から内陸部に向けて敷設された鉄道網が，交易活動と結びついた南部へのムスリムの進出をさらに促進した。

1955年の資料によれば，AOF構成植民地でのムスリムの人数は表4-1のとお

表4-1　AOF構成植民地での宗教別人数と比率（1955年）

（単位：上段 人；下段カッコ内 %）

	ムスリム	アニミスト	カトリック	計
ニジェール	1,846,974 (72.4)	700,000 (27.4)	3,700 (0.1)	2,550,674
セネガル	2,284,680 (81.8)	430,142 (15.4)	76,765 (2.7)	2,791,587
ギニア	1,591,135 (71.3)	622,999 (27.9)	17,691 (0.8)	2,231,825
フランス領スーダン	1,900,255 (56.9)	1,430,066 (42.8)	7,796 (0.2)	3,338,117
オートボルタ	524,495 (16.7)	2,528,347 (80.6)	82,317 (2.6)	3,135,159
コートジボワール	510,037 (21.9)	1,666,664 (71.6)	150,442 (6.5)	2,327,143
ダホメ	275,000 (17.0)	1,171,860 (72.5)	170,318 (10.5)	1,617,178
計	8,932,576 (49.6)	8,550,078 (47.5)	509,029 (2.8)	17,991,683

（出所）"Note sur l'expansion musulmane en Afrique noire française"（Juillet 1955）（ANOM 1AFFPOL/2260）

りである。ムスリムの人口比率が高い植民地は，順にセネガル（81.8%），ニジェール（72.4%），ギニア（71.3%），フランス領スーダン（56.9%）である。モーリタニアはこの資料に含まれていないがムスリム人口が圧倒的多数を占めていた。それ以外の3つの植民地期でのムスリムは人口の2割から2割弱にとどまっている。西アフリカにおけるムスリムの拡大の歴史的な経緯にほぼ沿ったかたちでムスリムが分布していることが確認できる。

AOFにおけるフランスの統治において，イスラームは間接統治の手段として利用された。フランスのAOF統治では，各植民地での地方行政区分の最上位にあたる管区（cercle）とそのひとつ下の階層である準管区（subdivision）ではフランス人行政官が長を務めたが，それより下位の階層となるカントン（canton）とヴィラージュ（village）ではアフリカ人が長として任命された。これら間接統治の行政区分の長として任命されるアフリカ人は，当該地域における民族や慣習などに基づいて推挙された有力者であって，植民地当局が従順な人物として認め

る者が指名された。イスラームが支配的な地域の場合では，ムスリムの名士が長として任命されることとなった。

西アフリカで従来から普及してきたイスラームはスーフィズムである。フランス統治下においては，具体的にはカディリー教団，ティジャーニー教団，ムーリッド教団などが知られ，そのほかに重要な導師（シャイフ）の信徒集団も存在感を示していた。スーフィズムでは導師が信徒を導く。植民地当局はこれらの導師を有力者として認知し支配することによって，その下に集う信徒への支配力も行使した。なおAOFでは，統治の仲立ちをすることになったこういったムスリムの有力者はしばしばマラブー（marabou）というフランス語の呼称で呼ばれた。この呼称は植民地当局が用いたほか，統治の道具となった有力者をムスリムが批判的に指し示す文脈でも使われた。

支配の手段としてイスラームを捉える植民地当局にとって，ムスリムが従順かどうかは重大な関心事であった。このためAOFでは，各構成植民地の総督府とAOF全体を統括する総督府（以下，AOF総督府）が現地でのムスリムの動向を監視し，フランス本国の担当省庁[1]と緊密な情報共有を行いながら対ムスリム政策を決定していた。その当時，フランス植民地当局は，西アフリカのムスリムを，統治に協力的で従順な者たちと潜在的・顕在的に反抗的な者たちに二分して捉えていた。ムスリムの側も植民地当局からの弾圧を恐れ，全体の傾向としては植民地当局に従う態度が選択された。

「反抗的」とみなされた勢力として，植民地当局から「ハマリスト」(Hamallistes) と呼ばれた一団があった。これは教義上の確執から19世紀末にティジャーニー教団から分かれたタリーカに起源をもち，20世紀初めにこのタリーカの指導的立場についたハマーフッラーという人物の名前から，このように植民地当局から呼称された（坂井 2004, 221）。ここではハマウィーヤと呼ぶ[2]。ハマウィーヤの教義は過激なものではなかったが，植民地当局と手を結んだティジャーニー教団主流派に対して批判的なスタンスをとったという経緯から，「政治的批判を許容

1）AOFを管轄した植民地省は，第4共和制下では海外フランス省という名称となった。

2）他のタリーカの表現とそろえて「ハマウィー教団」とする選択肢もあるが，「教団」という日本語の語感が想起させるほどの大きな規模や組織性を持ったわけではないことを考慮し，「ハマウィーヤ」という表記をとることにしたい。

しない植民地支配下にあって，既成の権力機構から排除された人々にとって反抗の姿勢を表明する手段として選択された」(坂井2004, 222）とされる。このため植民地当局はこの勢力を執拗に警戒し，とりわけ1920 ～ 40年代にかけて有力者の逮捕・拘束などの弾圧策がしばしばとられた。

だが，独立運動が本格化した1940年代半ば以降の時期には，ハマウィーヤに対する植民地当局の警戒感は低下した[3)]。この時期に新たに当局の警戒対象として浮上したのが，中東やエジプトで盛んになったイスラーム復興運動の思想を学んだムスリムたちである。前述のとおりこれがAOFの文脈において「改革派」と呼ばれる人々であり，植民地当局の用語としてはほかにも，「ワハビスト」（wahhabiste）や「ワハビット」(wahabites）という表現もとられることがある（Kaba 1974; Miran 2006)[4)]。植民地当局からの警戒の対象となったこれらのムスリムが，独立運動，とりわけRDAとの接触をもつ傾向がみられる。

次に独立運動が展開された制度的環境を確認したい。1944年より前のAOFでは，フランス市民権をもつ者のみが選挙権・被選挙権をはじめとする政治的権利を行使できた。フランス市民権は，フランス本国出身者のほか，AOF内のある特定の地域（古くからの植民地であったセネガルの4コミューン）の出身者と帰化が認められたごく一部のアフリカ人のみが有していた。フランス市民権をもつアフリカ人のなかにはフランス国民議会議員に選出された者もいた[5)]。ただ，ほとんどのアフリカ人は市民ではなく臣民（sujet）という身分に置かれ，政治的権利を行使することが認められていなかった。司法権に基づく裁判も受けることができず，行政官による裁判の対象となるなど市民的権利も制限されていた。

フランスが1944年にナチスドイツの支配を脱すると，新しい共和制を樹立するための新憲法の制定作業が始まった。この作業は，新憲法草案を作成する国会（憲法制定議会）の選出，憲法草案の国民投票，新憲法に基づく国会（国民議会）

3）ハマーフッラーが1943年に流刑先で死亡したことや，信徒による目立った活動がなくなったことが背景にある。

4）AOFの文脈における「ワハビスト」とはおもにフランス植民地当局が使用した他称であって，18世紀のアラビアの思想家に起源をもつワッハーブ運動と直接の系譜的な関係を有することを意味しない。

5）その代表的な人物が，第1次大戦のアフリカ人兵の募集活動などで知られるブレーズ・ジャーニュ（Blaise Diagne. 1914 ～ 1934年にフランス国民議会議員に在職）である。ジャーニュについては小川（2015）を参照。

の発足という一連の段階を踏むものだったが，ここで植民地のアフリカ人にも少しずつ参政権が認められた。アフリカ人の投票権は当初は制限されていたが，徐々に拡大され，1950年代後半には普通選挙制が採用された[6)]。

フランス国会の議員と各植民地に置かれた議会の議員のポストは，各植民地を選挙区として直接選挙で選出された。このほか，フランス本国の上院（元老院），フランス第4共和制で置かれた，フランス本国とフランス植民地を一体とする「フランス連合」(Union française）という枠組みに対応する議会（フランス連合議会），AOF全体に対応する議会（AOF大評議会）など，各植民地議会の議員の互選による間接選挙で議員が選出されたポストもあった。これらの公選職がアフリカ人政治家たちが台頭していくステップとなった。

すなわち，この時期に登場したアフリカ人の政治家たちには，出身植民地，AOF，フランス本国という3つの政治活動の場が存在した。これらの3つの場でうまく存在感を示すことによって，政治家は自らの権威，名声，支持を相乗的に高めていくことが可能だった。たとえば，前述のウフェ＝ボワニは，フランスのアフリカ植民地における強制労働の廃止をさだめた法律をフランス本国議会で議員立法によって成立させた（1946年）ことにより，AOFを含むサハラ以南アフリカ全域にアフリカ解放の闘士としての政治的名声を広くとどろかせ，その名声が出身植民地やAOFレベルでの彼の支持基盤をさらに確固なものとした。

ただ，アフリカ人議員は数が少なく，また政治的な経験も相対的に乏しかったこともあり，本国政界での活動を行うためには他の政治家や政治勢力の協力が必要であった。実際，AOF選出の議員たちは，フランス本国の政党との連携やアフリカ出身の議員同士での党派形成を行った。このような背景からAOFでの植民地横断的な政治運動という方向性が登場してきた。アフリカ人政治家の間には政治信条に一定の差があったため，アフリカ人全員を広く結集するブロックは形成されなかった。アフリカ人は大きく，フランス共産党と連携したグループ，フランス社会党と連携したグループ，フランス植民地当局に親和的なグループに分かれ，各グループがそれぞれAOFでも連携関係の開拓に乗り出した。

本章で注目するRDAは，このうちフランス共産党と連携したグループが組織

6）ただ普通選挙とはいっても，植民地に割り当てられた議席は極めて少なかった。

したものであり，もっとも先鋭な独立志向を掲げる反植民地主義的なスタンスを特徴としていた。このことが改革派ムスリムの支持を引き寄せるにいたった経緯と状況について，次節でみていきたい。

2　改革派ムスリムとRDA――連帯の構築と喪失――

2-1．ウフェ＝ボワニの登場とRDA結成

まず，RDA結成の中心となったウフェ＝ボワニの経歴から確認しておきたい。ウフェ＝ボワニは，1905年にコートジボワール中央部の有力首長の家に生まれ，AOFの高等教育機関で補助医としての資格を取得したのち，植民地行政の保健衛生部門に携わる職員として勤務した。そののち相続や購入によって得た土地を使ってカカオ，コーヒー，パイナップルなどの農園を経営するようになり，コートジボワール有数の大農園主へと成長していった。ウフェ＝ボワニは1944年にアフリカ人農民組合（Syndicat agricole africain: SAA）という組織を設立した。植民地当局やフランス人財界人を相手に価格交渉を行うというこの組合の目標は，アフリカ人の生産者・流通業者の大きな関心を集め，設立初年度に会員数は2万人を突破した。

ウフェ＝ボワニは自らの資金力とSAA の組織力を基盤に，折しもアフリカ人にも開かれ始めた政治の世界に進出した。まず，1945年8月に開催された，コートジボワール植民地の首府であるアビジャン（Abidjan）の市議会選挙で多数派を制すると，同年10月に実施されたフランス憲法制定議会選挙で，コートジボワール植民地の臣民身分枠の選挙区（定数1）で当選を果たした。

憲法制定議会に参加した他の植民地出身のアフリカ人議員との対話を通して，ウフェ＝ボワニは，アフリカ人議員がフランス政界で埋没しないための連帯と，植民者に対抗するための領土と民族を超えた民主的な大連合の形成という2点の必要性を認識したとされる（Kaba 1987, 313）。これを踏まえ，1946年10月にRDAが創設された。フランス領スーダンの首府バマコ（Bamako）で開催された創設大会には，AOFにとどまらず，アフリカの他のフランス植民地からも含めて800人が参加し，アフリカの独立運動における存在感を示すものとなった。

ただ，植民地当局の圧力を受けて穏健な政治勢力が参加を見合わせた結果，RDAは，アフリカ人の大連合という構想の実現には及ばず，また，もっぱら急進的な指向性をもつ政党が集まる集合体となった。植民地レベルでの政治を主導したRDA参加政党には，コートジボワール民主党（Parti démocratique de Côte d'Ivoire: PDCI），スーダン連合（Union soudanaise: US），ギニア民主党（Parti démocratique de Guinée: PDG）があげられる。

加えてRDAが備えた急進性という性格は，前述した通り，フランス政界でフランス共産党と連携したことにも支えられたものだった。フランス共産党はナチス支配時代のフランスにおいてレジスタンスを遂行した主要勢力のひとつとして，第2次大戦直後のフランス政界では大きな存在感を示していた。また，反帝国主義，反植民地主義を掲げる同党のスタンスは，アフリカ人の政治運動との関連では早期の独立を指向する路線との親和性が高いものだった。

2-2. 急進性を接点としたムスリムの参加

RDAが担ったこの急進性という性格がムスリムとの接点になった。まずハマウィーヤは，1946年にRDAが創設されると，「RDAに統合されていき」，宗教的な立場からではなく，政治的な組織を通して植民地支配への抵抗を試みるようになったとされる（Alexandre 1970, 498, 507）。また，植民地行政当局からの圧力を受けてきたことがハマウィーヤがRDA支持に回った背景にあるとも指摘されている（Cruise O'Brien 1986, 79）。これはすなわち，政治的な機会の開放が始まった1940年代半ば以降の環境においては，ハマウィーヤに代わってRDAが「反抗の姿勢を表明する手段」という社会的な役割を担うようになったということだともいえるだろう。

改革派ムスリムたちもRDAの支持に回った。代表的な事例として知られるのが，1951年に立ち上げられた「スッバーヌ・アル・ムスリミン」（*Subbanu al-Muslimine*，「若いムスリムの会」の意）である。これはイスラーム復興運動に同調する若者たちによって創設された柔軟なコミュニティ的構造だとされ，「親アラブ的なイデオロギーと政治的観点からの植民地体制への顕在的な反対姿勢」を携えて，「RDAの側に立った独立闘争に参加する」ものであった（Miran 2006, 251-252）。「スッバーヌ・アル・ムスリミン」は，論者によっては「スッバーヌ運動」とも表現

されるが，スッバーヌ運動が「RDAのイスラーム部門を構成し」，「改革派ムスリムが政治的な支持者を積極的に開拓した」とする指摘もある（Cruise O'Brien 1986, 79）。

なお，スッバーヌ運動にはハマウィーヤも参加したとの指摘がある（Cruise O'Brien 1986, 79）。このことは，スッバーヌ運動はかならずしもイスラーム復興運動系のムスリムによって排他的に独占されたものではなく，スーフィズムのなかでの改革を志向する者たちも加わったものであったことを意味しよう。

ムスリムたちがRDAを支持した理由に関しては大きく2点が指摘されている。第1に，植民地統治の手段となったイスラームへの批判である（Kaba 1987, 314）。改革派ムスリムは，マラブーと呼ばれる人々のことを，「魔術を売りつけるいかがわしいセールスマンであり，（アラビア語を教授することもなく，イスラームに関する高度な学びもない）価値のない教育を提供する者たち」と捉えていた（Cruise O'Brien 1986, 79）。にもかかわらず，これらのマラブーたちは植民地当局との結託によって温存され，好ましからざるイスラーム実践をはびこらせているという認識が改革派ムスリムにはあった。この論理の下では，イスラームの現状を正そうとする宗教的な指向性は，必然的に，マラブーたちを温存させている植民地体制の打破が必要だとの政治的な指向性をも伴うこととなる。植民地体制に対して抗するRDAが，自らが宗教的な改革を成し遂げる過程で不可欠な政治的改革を実現してくれる勢力として立ち現れるのは，このような論理においてである。

理由の2点目はRDAが示した多元主義と連邦一体主義（unitarisme）が改革派イスラームを惹きつけたことである（Kaba 1987, 317-318）。ここでいう多元主義とは，ひとつの植民地にこだわるのではなく，複数の植民地を横断するかたちでの運動のあり方を示したRDAの態度のことを指す。そもそも西アフリカにおけるイスラームは歴史的にみても広域的に展開してきたのであり，ムスリムのなかには交易を職業とする民族も多かった。ムスリム商人の越境的で自由な活動を保障してくれる政治的枠組みは，植民地ごとの閉鎖的なナショナリズムではなく，広域的な連邦主義の枠組みであり，それを明示的に示していた有力勢力のひとつがRDAであった。

ムスリム商人はRDAに対する大衆的な支持が形成されるうえで大きな役割を

果たしたと指摘されている。もっともよく知られた例がハマウィーヤの流れをくむヤクバ・シラ（Yacouba Sylla）という人物である。彼は植民地当局から危険視され，1930年代にコートジボワールで収監されていたが，釈放後にコートジボワールに定着して経済活動（農園経営と交易）をはじめ，彼を慕う信徒らが提供する労働も手伝って大きな富を築いた（Traoré 1983, 206-208; Kipré 1985, 181）。彼自らが政治運動を行うことはなかったが，RDAの機関誌『覚醒』(*Le Réveil*）の刊行資金は彼が出していたとされる（Bogolo Adou 1987, 324）。ムスリム商人は西アフリカ各地を結ぶトラック輸送網を通して交易活動を行いながらRDAの機関誌や宣伝パンフレットの配布を行い，大衆的な動員に大きな役割を果たしたことが指摘されている（Kaba 1987, 314）。

このような改革派を中心とするムスリムからの支持も手伝って，RDAがいくつかの植民地において成功を収めたことは前述のとおりである。

2-3. 連帯の喪失

植民地期末期に移るにつれ，宗主国フランスと植民地のアフリカ人政治運動の間の関係は変質していくことになった。変質とは，端的には，AOFのアフリカ人の政治運動が総じて親仏的な傾向を強めていったことである。それはRDAも例外ではなかった。

RDAは，1940年代後半に激化した植民地当局からの厳しい弾圧をかわすために，早くも1950年にはフランス共産党との連携解消を余儀なくされた。その後もRDAの公式のスタンスは反植民地主義的なものでありつづけたが，新たな連携相手を求めて中道系と手を組んだことによって，実際の政策指向がより穏健なものへと変化していくことは否めなかった[7)]。RDAリーダーのウフェ＝ボワニは1956年にフランス本国政府の閣僚となるが，これはRDA穏健化の最も目にみえる表れであった。かくして1950年代半ば以降のRDAは，フランス当局と協調する現実路線を強めるウフェ＝ボワニら幹部と，より強い植民地解放のスタンスを

7）AOFでは，セネガルのサンゴールらを中心とするフランス社会党(Section française de l'Internationale ouvrière: SFIO）と連携した勢力がすでに存在していたが，同じ左派系とはいえRDAとの間には対立関係があった。

とる一般の党員の間に深刻な乖離が進行していくこととなった。

RDAと改革派ムスリムの関係にとって大きな意味をもつ出来事が，フランス本国と植民地の関係のあり方を見直す1956年の「枠組み法」(Loi-cadre）である。アフリカ出身の政治家たちの間で最も支持を集めていたのは，「AOF全体がひとつの国として独立したうえで，フランスと対等な立場で連邦を構成する」という案であった。この案は，アフリカ側の結束を維持しつつ，政治的独立も実現し，かつフランスとの制度的な紐帯も維持できるというものであった。しかし，フランス側が枠組み法で示したのは，各植民地を自治共和国として独立させる構想であり，アフリカ側の期待とは反するものであった。

このタイミングでRDA党大会が開催され，党執行部の態度に注目が集まった。しかし，この党大会では，「連邦的な制度という原則を確認しながらもフランスとの結びつきを重視するという点しか示されず，枠組み法にまつわる疑念は払拭されなかった」(Kaba 1987, 317-318)。この点はとくにRDAを支持していた改革派ムスリムにとって，連邦一体主義という枠組みが壊れてしまうかもしれないという危機感を引き起こすことになった。

改革派ムスリムの対応は素早く，RDA党大会の3カ月後の1957年12月末に，ブアケ，バマコ，カンカン（Kankan. ギニアの重要都市のひとつ）の改革主義者がダカールを訪問し，それまではむしろ敵視していたスーフィー教団の有力者たちとの対話に乗り出した（Kaba 1987, 317-318)。ダカール・イスラーム会議（Congrès islamique à Dakar）と呼ばれたこの会合では，有力者たちが，同じムスリムとして共通の問題意識をもっていることが確認された。またこの会合では，AOFが連邦形態で独立するべきというアピールが出された。RDAが曖昧なまま態度を決定しなかった問題について，ムスリムが明確な態度表明を行ったわけである（Kaba 1987, 317-318)。これは同時に，RDAの政治路線に対する絶縁の表明であるとも解釈されるものである[8)]。

その後，枠組み法の構想を継承した第5共和制憲法草案が提示された。連邦化

8）なお，改革派ムスリムの最有力組織であったムスリム文化連合（Union culturelle musulmane: UCM）は，のちの第5共和制憲法草案に対して「反対」を訴えた。改革派ムスリムが，連邦一体主義を重視していたことを示すもうひとつの例である。

を最も強く要求していたギニアでは，RDAのなかで最も急進的な姿勢を維持するギニア民主党（PDG）が支配的政治勢力の位置にあり，憲法草案に「反対」するキャンペーンを張った。そのほかのすべての植民地では，支配的な政治勢力はフランスとの対立を嫌い，新憲法成立後に再交渉できることを期待して，「賛成」とした。「賛成」としたなかには，RDAのコートジボワール支部であり，ウフェ＝ボワニが率いるコートジボワール民主党（PDCI）も含まれていた。ウフェ＝ボワニが，自ら率いたRDAが掲げた連邦一体主義の思想を放棄したことが明白になったのである。

第5共和制憲法は賛成多数で成立し，反対したギニアは直後に独立宣言を行った。他の植民地はフランス共同体内自治共和国というステータスで「独立」した。これはフランスとの連邦化交渉の可能性を残すためという説明であったが，その交渉が行われる気配はなく，各自治共和国はその2年後の1960年に相次いで独立することとなった。

このときウフェ＝ボワニは，「私は連邦へと続く玄関口で待っていた。しかし結局枯れた花が手に残っただけであった」と語ったとされる（ヤコノ1998, 164）。しかし，実際のところ，連邦への玄関の扉が開かないことは，すでに1957年のRDA党大会時にウフェ＝ボワニにはわかっていたことであろう。RDAはたしかに連邦一体主義を指向性のひとつとして掲げてはいたが，ウフェ＝ボワニ自身は，社会党系のアフリカ人政党が進めた連邦一体での独立案には反対していた。この文脈においてウフェ＝ボワニは，実際には，連邦一体主義どころか，AOFの「バルカン化」路線――フランス当局は独立後のアフリカ諸国の影響力を減殺するため各植民地がばらばらに独立するこの路線を支持していた――を推進する代表的なアフリカ人政治家として活動したのだった。つまりウフェ＝ボワニ自身が，自分が旗揚げしたRDAの政策志向から乖離していったのである。

かくして，1940年代半ばから確立された改革派ムスリムとRDAの間の連帯は，ウフェ＝ボワニら幹部の現実路線への転換によって徐々に空洞化し，1950年代後半には植民地独立のあり方をめぐる見解も乖離するに至った。改革派ムスリムが期待した連邦一体主義は実現せず，独立を迎えた。RDAを構成していた各政治勢力も植民地横断的な運動を事実上放棄し，各支部はそれぞれが本拠とする植民地での活動に専念していくことになった。これにともない，ムスリムとの協力

関係もそれぞれの植民地における――いわば「ナショナルな」――文脈のみでの協力関係へと転換していくことになった。ギニアとフランス領スーダンでは改革派を含むムスリムがRDA支部であった支配政党の重要な支持基盤を構築することとなった。では，コートジボワールではどうなったのだろうか。

3　改革派ムスリムに対するウフェ＝ボワニの影響力

コートジボワール植民地に比較的多くの改革派ムスリムがいて，活発な活動を行っていたことを示す指摘は多い。たとえば，1950年代初めにAOF総督府が実施した調査報告書でも，「ワハビスムの数はコートジボワールでは比較的多い」との記載があり，その背景として，「伝統主義のマラブーらの無知と欲得づくへの反抗に加え，我々［植民地当局］に対する抗議，不満，ひいては敵意をも表明する方法としての面があった」(Beyries 1952, 87）との認識が示されている。

とはいえ，この指摘はAOF全体についての一般的な理解にほぼ沿ったものにとどまっており，コートジボワールならではの政治とムスリムの関係のあり方を伝える具体的な記述とまではいえない。むろんこれはこのAOF総督府の報告書だけの問題ではなく，先行研究に全般的にみられる傾向でもある。コートジボワールのムスリムに関して浩瀚なモノグラフを記したミランにしても，RDAと密接な関係のあったスッバーヌ運動のコートジボワールでの活動については，「よくわからない」という率直な見解を記しているほどである（Miran 2006, 251-252)。

このような研究状況に照らしたとき，数少ないエピソードとして注目されるのが，コートジボワール第2の都市ブアケで1950年代初めに起こった中央モスクのイマームの選任をめぐる係争である。ミランはこの事件について，2次資料と聞き取り調査に基づき，コートジボワールの「ワハビスト」が交易拠点となった都市に定着してコミュニティを作り，「これらの場所のほとんどで1950年代にワハビストが植民地当局を後ろ盾とした多数派である伝統主義者と対立することとなった」なか，そのなかで最も深刻だった事例として紹介している（Miran 2006, 250-251)。またハンレッタは，フランス植民地当局が残した行政文書に依拠しながら，当時ウフェ＝ボワニがRDAへの支持票の獲得のためにコートジボ

ワールの有力ムスリムの支持獲得に取り組んでいたと指摘し，その例としてこの事件に言及している（Hanretta 2009, 109）。

これら先行研究の指摘は，このブアケでの事件が，植民地期コートジボワールにおいて展開されたムスリムとRDAが関係した代表的な出来事のひとつであったことを示唆している。そこで以下では，フランス国立海外公文書館に収蔵されている資料に基づき，この事件に関して先行研究が触れていない事実関係を明らかにするとともに，コートジボワール植民地におけるRDAとムスリムの関係について分析を行ってみたい[9)]。

ブアケはコートジボワールの領土の中央部に位置する都市である。植民地期に軍都として建設され，そののち鉄道の駅が開設された。鉄道は，AOF有数の港をもつコートジボワールの首府アビジャンと内陸のオートボルタ植民地を結ぶもので，その中間地点に位置するブアケは大いに商業的な発展を遂げた。人口は1945年に2万2000人であったものが1960年には6万人に急増したとされ（Daddieh 2016, 124），その多くはAOF内のムスリム人口が多い植民地からの移民で占められた。この結果，当時からブアケの人口の圧倒的多数がムスリムであった。また，ギニア内陸部に位置する都市カンカン，フランス領スーダンの首府バマコとならび，改革派ムスリムが多く集まる都市として知られた。つまり，ブアケは，AOF内において，ムスリム商人の活動とムスリムの改革運動の双方

9）ここで参照するのは，ANOM収蔵のフランス植民地省ムスリム事情局文書である。Miran（2006）による記述は2次文献と聞き取り調査に基づくもので，公文書館の行政文書には言及していない。Hanretta（2009）は，ANOM収蔵のフランス植民地省ムスリム事情局文書「1AFFPOL/2259/1」に収められた四半期報告書に依拠している。ここで筆者が参照するのは，それとは異なる「1AFFPOL/2259/4」というムスリム事情局文書である。この文書は，ブアケの係争の途中経過において，AOF総督のコルニュ・ジャンティユが海外フランス相に宛てて送付した1953年7月8日付けの親展書簡（以下，「AOF総督発大臣宛書簡」），この親展書簡に添付された3点の資料，すなわち（1）ベウミという町にいたウフェ＝ボワニからバイイ・コートジボワール総督に宛てた1953年6月27日付け電文の写し（以下「ウフェ発総督宛電文」），（2）バイイ・コートジボワール総督からブアケのウフェ＝ボワニに宛てた1953年6月27日付けの書簡（以下「総督発ウフェ宛書簡」），（3）バイイ・コートジボワール総督からコルニュ・ジャンティユAOF総督に宛てた1953年6月29日付け書簡（以下，「総督発AOF総督宛書簡」），「AOF総督発大臣宛書簡」から2カ月後の1953年9月に書かれた「ブアケのイマーム職に関するノート」と題する無署名の文書（以下，「ブアケのイマーム職に関するノート」），日付不明の「コートジボワールのイスラーム」と題する無署名の文書からなる。「ブアケのイマーム職に関するノート」は，この史料群に含まれていない重要な書簡にも言及しながら書かれたものであり，ムスリム事情局の職員が作成したものとみるのが自然であろう。

において重要な意味をもつ国際都市であった。

1950年11月以降，ブアケでは，中央モスクのイマーム職をめぐり，改革派と伝統主義者の深刻な対立が展開された（表4-2）。まず，1950年11月に，イマームを「汚れた人物」だと批判し，交代を求める動きが起こった。史料によれば，この動きは「RDAのムスリムたち」によって行われた[10)]。その当時のブアケでは，ムスリムの3分の2が伝統主義者，残りの3分の1が改革派とされ，RDA支持者は改革派のほぼ全員，伝統主義者のあいだでも3分の2にのぼるとされた[11)]。ウフェ＝ボワニの出身植民地という事情から，また，移民の多くの出身地であるフランス領スーダンとギニアがともにRDAの強い地域ということもあって，改革派か伝統主義者かの違いを超えてRDA支持が広がっていたとみられる。このよう

表4-2　ブアケの係争のタイムライン

時期	出来事
1950年11月	ブアケのRDAのムスリムたちが中央モスクのイマーム，ベニ・ケイタ（Béni Keïta）への批判を突然開始　新イマーム選出にはいたらず
1951年8月19日	カンカン［ギニア］出身のカビネ・ジャーヌが新イマームに選出。RDA支持者として知られるドラマン・シッセがイマーム補佐に選出。 伝統主義者の反感が高まる。RDAを敵視するブアケのセネガル人コミュニティはモスクに行かなくなった。当局も治安維持の観点から乗り出す。
1952年11月1日	ブアケ管区長官が中央モスクの閉鎖措置を発令
1953年4月29日	人々の間に和解の機運が高まっているとみたブアケ管区長官がモスクを再開
1953年5月1日	信徒2000人が集まる礼拝でカビネ・ジャーヌがイマーム職からの退任を表明
1953年5月7日	新イマームにアンスーマナ・シラが就任
1953年6月17日	ブアケ管区長官がイマーム補佐を「決定」し、住民に告知
1953年6月24日	イマーム第1補佐バウドゥ・トゥレが主催する朝の礼拝で殴り合いがあり，伝統主義者が不満を表明。 問題の背後に、コートジボワール選出の国会議員が関与しているという噂が流れる。治安部隊の介入によって礼拝が中止。バウドゥ・トゥレを含む4人が逮捕。その日のうちに仮放免。
1953年6月27日	ブアケ管区長官がウフェ＝ボワニと面会。 面会後ウフェ＝ボワニがコートジボワール総督に怒りの電文を送る。コートジボワール総督がウフェに返信。
1953年6月29日	コートジボワール総督がAOF総督にこの件を報告
1953年7月9日	AOF総督が状況報告のため植民地相に書簡を送る

（出所）フランス海外公文書館収蔵資料（ANOM 1AFFPOL/2259/4）に基づき，筆者作成。

10）「AOF総督発大臣宛書簡」（ANOM 1AFFPOL/2259/4）。
11）「ウフェ発総督宛電文」（ANOM 1AFFPOL/2259/4）。

な状況を踏まえると，「RDAのムスリムたち」という記述だけから，要求したムスリムたちの宗教上の立場について確定的な判断をするのは難しいようにもみえる。

だが，この交代要求――この時はイマーム交代にはいたらなかったが，対立は続いた――から9カ月後の翌1951年8月に改革派ムスリムから新イマームとイマーム補佐が選出されたのだという。この一連の流れをみるとき，1950年11月に最初に動きを起こした者たちを指す「RDAのムスリム」という表現は，改革派ムスリムのことを指しての表現であったと理解できるように思われる。またこの理解は，RDAが改革派ムスリムから広く支持されていたという西アフリカの文脈に照らして違和感のないものと考えられる。

すなわち，1950年11月から1951年8月にかけての動きは，改革派ムスリムが自分たちに近い人物が礼拝を取り仕切ることを求め，数カ月間の対立を経て，伝統主義者が譲歩したことで，この人選が成り立ったという流れと解釈できる。これは先行研究での言及にも合致している（Miran 2006, 250-251）ちなみに，この新イマームの選出は，信徒からの一致した承認のうえでなされたものだと史料は記している[12)]。

対立は新イマームの選出後も続いた。とくに問題となったのは，新しいイマーム補佐――ドラマン・シッセ（Dramane Cissé）という人物――が改革派の流儀に則って，腕を交差させた礼拝を公然と行ったことに対してである。伝統主義者にとって，礼拝は腕を体側にまっすぐ下げたままで行うものであり，流儀の異なるムスリムと礼拝の場を同じくすることに対して強い拒否感が表明されたという。また，このイマーム補佐は，RDA支持を公言していた人物であったと史料に明記されており，RDAに対して反感をもつ者が多いセネガル系のムスリムたちが中央モスクの礼拝に行かなくなってしまったのは，そのことも理由のひとつだと史料は語っている[13)]。新イマームそのひと――ギニア出身のエル・ハジ・カビネ・ジャーヌ（El Hadj Kabiné Djane）――に関する問題があったかどうかは，史料はとくに記していないが，改革派への理解があることで知られた人物であったこ

12)「AOF総督発大臣宛書簡」（ANOM 1AFFPOL/2259/4）。
13)「AOF総督発大臣宛書簡」（ANOM 1AFFPOL/2259/4）。

とは間違いない[14)]。

このように，教義上の差，政党支持，出身植民地などのさまざまな違いが結びついたかたちで，ブアケのムスリム社会は深刻な内部対立を抱えるようになった。これを受け，治安上の懸念となることを危惧した植民地当局が対話の仲介や論点整理などの取り組みを行ったが，対立は収まらなかったため，1952年11月にはブアケを管轄するフランス人行政官トップであるブアケ管区長官によって中央モスクの閉鎖という強い措置が取られた。この閉鎖は翌1953年の4月末まで続くこととなった[15)]。

その後，ムスリムの間で和解の雰囲気が高まったとの判断に立ち，ブアケ管区長官は1953年4月29日に中央モスクの閉鎖措置を解除した。この再開はすべてのムスリムによって歓迎され，翌々日の5月1日の礼拝でカビネ・ジャーヌが退任を表明した。これに伴ってイマーム補佐も退任となった。その1週間後の5月8日には，伝統主義者のエル・ハジ・アンスーマナ・シラ（El Hadj Ansoumana Sylla）が新イマームになることが発表され，改革派と伝統主義者もともにこれを歓迎して新イマームの下で礼拝を行った。改革派寄りのイマームとイマーム補佐が退任し，伝統主義者の意向に叶うかたちでの解決が実現したわけである。

このイマーム交代劇の立役者がウフェ＝ボワニだったことが史料から確認できる。ブアケでのRDAの支持者に改革派と伝統主義者の双方がいたことは上でみたが，ウフェ＝ボワニのもとには，この双方から，「自分たちの望みが叶えられなかったらRDAのメンバーであることをやめる」という訴えが寄せられるようになっていたという。自らの支持層の分裂を阻止し，和解を図るというのが，ウフェ＝ボワニが仲介に乗り出した中心的動機だったことがわかる。そこでウフェ

14）この新イマームとなる人物に，イマーム就任直前の時期に面会したAOF総督府の調査員は，その時の印象を次のように記している。「エル・ハジ・カビネ・ジャーヌはイマームとしての役割にふさわしい，バランスのとれた態度をとるよう努力している。彼はこの宗教の起源についての解釈における4人のイマームの権威を認める一方で，同胞団にも，ターバンを強制する慣行にも敵意を示した。彼は，コーランの唱句によって構成されていれば，御守りも問題がないと考えている。彼は，ワハビストの考えを広めた最初のひとりであるカンカンのカラモコ・シディキの弟子なのだが，むしろ，ガニョア［コートジボワールの都市名］のRDAの中心的な活動家であるエル・ハジ・モリテ・ジャビの考えに完全に同調している印象を与える。」(Beyries 1952,88-89)。改革派のスタンスを取りながらも，さまざまな信仰の慣行に対して寛容な人物としてここでは描かれている。

15)「AOF総督発大臣宛書簡」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。

＝ボワニは，ブアケのRDA党員に対して，「政治的な利益よりも，みんなが平和に働けるようにとの全体の利益を考える」という精神の下に，「ジャーヌの辞任，シッセの罷免，新イマームの選出，新イマーム補佐2名のうちひとりは独立派という案を受け入れるよう勧告した」のだという[16)]。

この介入がウフェ＝ボワニの一方的な言い分でないことは，コートジボワール総督がウフェ＝ボワニ本人に宛てた書簡からも確認できる。コートジボワール総督はこの書簡で，「ひとえに，あなたの取りなしにより――この点はAOF総督にもお伝えしております――和解に向けた最初の有効な結果を得ることができ，前イマームのエル・ハジ・カビネ・ジャーヌが退任し，新イマームのエル・ハジ・アンスーマナ・シラのもとに信徒が団結することとなりました」と謝意を表明している[17)]。コートジボワール総督の上長であるAOF総督に報告したことを言及していることからみて，単なる社交辞令ではない様子がうかがえる。

なお，新イマームのアンスーマナ・シラは自らの支持政党を一切明かしていない人物であったが，彼の側近たちは全員がRDAの支持者であるとされ，アンスーマナ・シラ自身も，伝統主義者でありながらRDAに親近感をもっている人物として受け止められていることは「衆目の一致するところだった」との指摘が残されている[18)]。ウフェ＝ボワニの立場からすれば，この人事は自党の支持者同士の和解という観点からも重要な意義をもつものであったといえる。

まとめれば，この1953年5月のイマーム人事は，ウフェ＝ボワニがブアケの改革派ムスリムに対して強い影響力を有していたことを示す格好の事例といえるだろう。ブアケの改革派ムスリムの立場を推測すると，教義上たいへん重要な意味をもつイマーム人事において譲歩することを受け入れうるほど，ウフェ＝ボワニからの働きかけが重視されていたということになる。先行研究で指摘されてきたようなRDAと改革派ムスリムの間の強い結びつきの存在を，この事例は裏書きしているといえよう。

---

16)「ウフェ発総督宛電文」ならびに「ブアケのイマーム職に関するノート」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。
17)「総督発ウフェ宛書簡」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。
18)「ブアケのイマーム職に関するノート」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。

4　ウフェ＝ボワニの激怒――浮かびあがる二面性――

とはいえ，次のような疑問が浮かぶ。RDAにとって改革派ムスリムが重要な支持基盤なのであれば，政治的な介入は，改革派ムスリムが求める結果をもたらすことにこそ使われるものではないのか，と。この疑問は，ブアケのイマーム人事に関していえば，イマームとイマーム補佐の退任を改革派は受け入れたわけであるが，この受忍に対して何らかの「補償」がなされる必要はなかったのか，ということである。実はこの点に関して，史料から浮かびあがるウフェ＝ボワニの態度はやや謎めいている。これを次に検討してみよう。

新たに就任したイマームは，自らが職務を行えない際に代わりとして礼拝を取り仕切るイマーム補佐の名を礼拝の場で信徒に示し，その同意を得ることが求められている。ところが，1953年5月初めに就任したブアケの新イマームの場合には，この本来行われるべき補佐の選任がすぐにはなされなかった。史料からは，新イマームとブアケ管区長官の対立が背景にあったことがうかがえる。もともと，新イマームは，イマーム職を引き受ける際の条件として，自分自身で補佐を指名することと，補佐は伝統主義者から選ぶつもりであることを示していた。その理由は，伝統主義者である自分が職務をこなせないときに，「ワハビット」が代わりを務めるというのは，純粋に宗教的な見地から考えられないということにあった[19)]。

これに対してブアケ管区長官が異議を唱えたようである。管区長官は，第1補佐を「ワハビット」の人物とし，第2補佐を伝統主義者とする案をもっていた[20)]。それに同意するよう新イマームに繰り返し働きかけたが，新イマームはこれに同意しなかった。そこで管区長官は，ブアケの8人のウラマー――伝統主義者が4人，

19)「ブアケのイマーム職に関するノート」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。

20）ブアケ管区長官がその案に固執した理由は関心を引くが，証拠となる史料がないのでここでは踏み込まない。ムスリム事情局作成と推察される「ブアケのイマーム職に関するノート」には，長官が，アフリカ人政治家の意向を汲むかたちでこの人事案に固執したということを示唆する記述がみられるが，その記述を裏付ける他の史料はみつけられなかった。またここで言及がある「アフリカ人政治家」が誰なのかも具体的に記されていない。

改革派が4人――を招集して同意を求めるという行動に出たが，伝統主義者のウラマー 4人全員がその案に反対した。にもかかわらず管区長官は，その翌日の1953年6月17日に，拡声器付きの車でブアケ市内に乗り出し，自らの案の通りにイマーム補佐が決定されたと宣言し，さらに今後，補佐の指名問題の再検討を企てたり，管区長官の決定に従うことを拒否したりする者は逮捕されるとも言明した[21)]。またこれらの宣言は，コートジボワール総督から問題解決のための全権を委任されているとの認識に立って行われたものであることもあわせて告知された。

その9日後の1953年6月26日に，管区長官の宣言によってイマーム第1補佐に「決定」された改革派ムスリムが主催する礼拝が中央モスクで開催された。伝統主義者のムスリムたちは，このイマーム第1補佐の礼拝中，モスクに入ろうとしなかったほか，信徒間での殴り合いの事件が発生した。治安部隊が介入してイマーム第1補佐を含む4人を逮捕した。4人はその日のうちに仮放免された。暴力行為はその後，幸いにも発生しなかったが，ブアケ市内では今回の人事の背景にコートジボワール選出の国会議員――その2名いるうちのひとりはウフェ＝ボワニ――が絡んでいるらしいという噂が飛び交ったという[22)]。

ここで注目したいのはウフェ＝ボワニの反応である。翌6月27日に，ブアケ管区長官は，ブアケの西50kmのところにある町ベウミ（Béoumi）に滞在していたウフェ＝ボワニのもとを訪問し，イマーム補佐をめぐり起こっている出来事について報告した。報告を受けたウフェ＝ボワニはすぐさま，コートジボワール総督に宛てて長文の抗議の電文を発した。ウフェ＝ボワニからの抗議を受けたコートジボワール総督は，その2日後の6月29日にこの件をAOF総督に報告し，面会したブアケ管区長官からの報告として「ウフェ議員がひどく怒っていた」とし，ウフェ＝ボワニが，「領土議会［植民地議会のこと］の次の会期では行政当局に協力できないだろう」と発言したほか，本件についてプレヴァン・フランス大統領とミッテラン氏にも申し入れを行う意向を示したという[23)]。

---

21)「ブアケのイマーム職に関するノート」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。

22)「ブアケのイマーム職に関するノート」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。

23)「総督発AOF総督宛書簡」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。なお，ここでいうミッテラン氏とは，後にフランス大統領を務めたフランソワ・ミッテラン（François Mitterrand）のことである。ミッテランは，海外フランス相在任中（1950～ 51年）にウフェ＝ボワニにフランス共産党との連携解消を決心させたことで知られる。ウフェ＝ボワニが親仏路線に転換するうえでのキーマンであった。

ウフェ＝ボワニの怒りの理由は何だろうか。1953年6月27日付けのコートジボワール総督宛の電文を見る限り，ウフェ＝ボワニの怒りの理由は以下の3点に要約できる。第1に行政当局による宗教への介入，第2に行政当局による政治介入，第3に自分の仲裁努力の成果が台無しになってしまったという不満，である。第1の宗教への介入は，ブアケ管区長官がイマーム補佐を「決定」し，さらには罰則にまで言及して信徒たちに強制しようとしたことを指す。ウフェ＝ボワニは「行政が宗教的中立の原則を逸脱して，イマーム補佐を押しつけた」という表現を使っている[24)]。この点についてコートジボワール総督は，結果的にはウフェ＝ボワニの主張に同意し，補佐の選任は信徒の承認が必要なものであり，ムスリムではない行政官の管轄ではないため，決定は無効だと管区長官に対して通達している。また，ブアケ管区長官に対して問題解決の全権を委ねると伝えたことは事実だが，そもそも行政官は宗教の問題に介入する権限を有するものではないという点も言明している[25)]。

第2の政治介入は，これまで述べてこなかった新しい内容となる。ここでウフェ＝ボワニは，コートジボワール植民地選出のもうひとりの国会議員であるセク・サノゴ（Sékou Sanogo）を念頭においた主張を行っている。サノゴはRDAにも社会党系にも属さない，独立派（indépendant）と呼ばれる政治路線をとった政治家であり，植民地期コートジボワール政治史においては，ウフェ＝ボワニの勢力抑制を狙う植民地当局によって支援を受けた人物として知られる。コートジボワール選挙区の2議席を争った1951年6月のフランス国会選挙において，RDAは6万7千票を獲得してトップに立ったものの2議席独占はできず，3万5千票を獲得したサノゴの政党と，比例代表制にしたがって議席を分け合うこととなった。1950年代初めは，植民地当局からの弾圧によってRDAの党勢が伸び悩んでいた時期でもあり，当時のRDAにとってサノゴはとくに警戒すべき政治的ライバル

24)「ウフェ発総督宛電文」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。

25）6月27日付けのウフェ＝ボワニからの電報を受け取った時点では，コートジボワール総督は，まさかブアケ管区長官がそのような手続きによってイマーム補佐を「決定」したとは認識しておらず，ウフェ＝ボワニに対する返信でもイマーム補佐の選任は適正に行われ，行政当局が宗教に介入したとの事実は当たらないと反論していた。だがその後ブアケ管区長官からの報告で実情を知り，認識を改めている。「総督発ウフェ宛書簡」，「総督発AOF総督宛書簡」，「ブアケのイマーム職に関するノート」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。

であった。

そのサノゴを示唆するかたちで，ウフェ＝ボワニはこの電文のなかで，ブアケ管区長官の決定が，「同僚［セク・サノゴ］の独立党が，RDAに勝ちを収めようとして働きかけていることに沿った決定」であったと非難している[26)]。ウフェ＝ボワニがイマーム補佐人事に関してサノゴの政治介入だといったのは，RDAと改革派ムスリムが結託しているという見方をサノゴがさかんに宣伝し，RDA支持者の改革派と伝統主義者を分断しようとしているという認識に基づく。つまりこの認識に立つと，イマーム第1補佐に改革派が指名されたことはサノゴの宣伝を裏書きする事態となってしまうというわけである。このような論理でもってウフェ＝ボワニは，ブアケ管区長官の決定が，自分が和解に務めた改革派と伝統主義者の対立をふたたび煽りたてかねないものであるとし，そこにサノゴの宣伝戦略に沿って自分の立場を弱くしようとする植民地当局の政治的介入を見い出しているのである。

実はサノゴの存在は，ウフェ＝ボワニが常に意識していたことであった。上述のイマーム交代に関する箇所（第3節）で，「ジャーヌの辞任，シッセの罷免，新イマームの選出，新イマーム補佐2名のうちひとりは独立派という案を受け入れるよう勧告した」というウフェ＝ボワニの電文を引用したが，ここでいう「独立派」がまさにサノゴ支持者をさしている。ブアケ管区長官が「決定」した2人の補佐のうちの一方が「独立派」だったのかどうかは残念ながら史料からはわからない。ただサノゴは，コートジボワールのムスリムの多くを占める民族――マリンケ（Malinké）もしくはジュラ（Dioula）とも呼ばれる――の出身であり，ブアケに住むジュラに対して「反RDA宣伝」を熱心に行ってきているとする指摘が史料に残されている[27)]。彼の働きかけがどの程度成功したのかどうかは不明だが，民族としてのジュラには，改革派と伝統主義者の双方がいたと考えられ，サノゴは民族としての帰属に働きかけることでRDAの支持層を切り崩そうとしたと理解できるだろう。

ウフェ＝ボワニの不満の第3点目は，自分の仲裁努力の成果が台無しになって

26)「ウフェ発総督宛電文」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。
27)「総督発AOF総督宛書簡」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。

しまいかねないということにある。第2点目を踏まえれば，ここでのウフェ＝ボワニの考えは，自分が肩入れしたことによって改革派のイマーム第1補佐が誕生したという理解が広まることになれば，RDA支持者の中の伝統主義者の反発が避けられず，改革派との対立が再燃しかねないというものだと理解できる。

ただ，この3点目から浮かび上がるのは，そもそもブアケのムスリムに対してどのような態度を取りたいのかという点に関して，ウフェ＝ボワニの態度がやや整合性を欠いているようにみえることである。以下，この点を検討してみたい。

改革派ムスリムが，自分たちの流儀で礼拝を主宰してくれるイマームのもとで祈りたいというのは，そもそもは信仰の領域の問題であった。ただ，それをあからさまに要求したことによって，伝統主義者の考える信仰のあり方と衝突し，信徒間の対立がもたらされてしまった。この対立が政治の領域――RDA支持層の分断――へと発展してきたことを受けてウフェ＝ボワニが介入したわけであるが，さらにその状況を利用しようとするライバル政党が加わり，分断を煽る行動に出た。その行動に植民地当局が一役買うかたちになったことから，ウフェ＝ボワニはそれを怒りのかたちで表明し，植民地議会最大勢力としての立場やフランス中央政界の大物とのコネクションをちらつかせて総督を威圧しているという構図となった。明らかに信仰の問題をはみ出し，すぐれて政治的な領域のこととしてこの事件は展開されていることがわかる。

ここで本節冒頭に掲げた問いに戻りたい。改革派ムスリムは，自分たちが支持する政治勢力（RDA）の勧告によって信仰上の願望を一方的に断念することをよしとしたのだろうか。この点に照らせば，イスラーム的な手続きに則っていないという瑕疵はあれど，改革派ムスリムがイマーム補佐に選任されたことはよろこばしいことであったに違いない。実際，6月26日に改革派ムスリムはこのイマーム補佐のもとで礼拝に参加したわけである。その一件に関して激高してみせるウフェ＝ボワニの態度は，改革派ムスリムが抱いた期待に対してあまりにも考慮を欠いたもののようにみえる。

実は，この問題についてウフェ＝ボワニ自身が興味深い記述を残している。コートジボワール総督に送った怒りの電文のなかでウフェ＝ボワニは，自分が介入した1953年5月初めのことを振り返り，「ジャーヌの辞任，シッセの罷免，新イマームの選出，新イマーム補佐2名のうちひとりは独立派という案を受け入れる

よう勧告した」という上で引用した箇所に続いて，こう記している。「少数者の改革派の者たちは，腕を組んで礼拝するというイマームをもつことを諦め，今後すべての礼拝は腕を伸ばして行うことになるだろう」。[28]ここから読み取れるのは，ウフェ＝ボワニが期待した仲裁努力によって実現されるべき帰結とは，改革派が「今後すべての礼拝は腕を伸ばして行うこと」――すなわち，1950年11月に顕在化した改革派ムスリムの願望を，中央モスクに関しては表明せず，同意できない流儀に則って礼拝を行うべし，ということのようにもみえる。ここに浮かびあがるのは，RDA支持者の結束こそが最大の関心事であり，そのためには信仰上の願望は抑えるべきだとするウフェ＝ボワニの考えである。

当時のウフェ＝ボワニに関しては，植民地当局が，RDA運動における重要な同志であるウェッザン・クリバリ（Ouezzin Coulibaly）の助言にもかかわらず，「「ワハビット」の利益を支持するという自分の計画に固執しているようだ」という認識を示していたことが史料からはうかがえる[29]。ウェッザン・クリバリの助言が具体的にどのようなものだったのかは明記されていないが，文脈からすれば，ウフェ＝ボワニの改革派ムスリムへの肩入れが過ぎるという態度を諌めるものかと読める。とはいえ，このブアケの係争におけるウフェ＝ボワニの介入のあり方をみるに，そこに改革派ムスリムの「利益を支持する」という側面を見い出すことは難しいように思われる。

すなわち，ウフェ＝ボワニは，自分の和解のための努力が無駄になってしまったという怒りを表明しているのであるが，実際のところ彼が用意していた和解のプランとは，改革派が自分たちの信仰上の願望を声高に主張せず，抑制することをもって成功の鍵とするものであった。この点において，ウフェ＝ボワニはムスリムたちの宗教上の利益ではなく，RDA支持者としての政治的な利益こそを追求したのだということができるだろう。

---

28)「ウフェ発総督宛電文」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。
29)「総督発AOF総督宛書簡」(ANOM 1AFFPOL/2259/4)。

結　論

以上，本章では，AOFの独立運動における重要な政治組織であったRDAが改革派ムスリムの支持を受けたことに関して，あまり具体的な事例が報告されてこなかったコートジボワール植民地での状況を解明する試みを行ってきた。AOFの改革派ムスリムにとって重要な都市であったブアケで，RDA支持という政治的スタンスとも絡む社会的な対立や政治家の介入があった事例について，これまで先行研究が示してきたよりも詳しく再構成し，分析を行ってきた。分析から浮かびあがったのは，RDAのリーダーであったウフェ＝ボワニが，教義上の対立を解消することを――とくに改革派ムスリムに対して――受諾させうるほどの強い影響力をRDA支持者に行使しえたことがまず確認された。これは既存研究において指摘されてきたRDAと改革派ムスリムの強い連帯関係を裏書きするものであり，コートジボワールにおいてもこのような関係が存在したことがわかった。

分析からもうひとつ明らかになったことは，ウフェ＝ボワニが改革派ムスリムに対して振るい得た影響力が，改革派ムスリムの宗教上の期待や願望に答えるようなかたちでは必ずしも作用していなかったようだということである。この点は，最終的に改革派ムスリムがRDAとの連帯関係を解消していくというAOF全体における動向を先取りしているかのようにも評価できる点といえる。連帯が失われていく兆候をそこに見い出すことが可能であろう。

最後に，ブアケ事件のその後について言及し，結びとしたい。残念ながら，このブアケ管区長官が「決定」した人事とそれをめぐるブアケでの対立が最終的にどのように解決されていったのかは，今回参照した史料からは確認できなかった。ただ，聞き取り調査にもとづいてこの事件を記したミランは，1953年5月の新イマーム就任とその補佐について次のような記述を行っている。なお，ここでは新イマームの名は「アズマナ・シラ」(Azoumana Sylla）と記載されている。

> 「ウフェ＝ボワニの助力によって最終的な妥協が成立した。伝統主義者のエル・ハジ・アズマナ・シラがイマームに就任し，伝統主義者から尊敬されているワハビストのエル・ハジ・バブドゥ・トゥーレが補佐を務めることと

なった。バブドゥ・トゥーレは週の間は，同じ地域にあるワハビストの小さなモスクのイマームを務めながら，金曜日とイスラームの祭日には中央モスクに来て，すべてのムスリムとともに祈った。」(Miran 2006, 250-251)

この箇所で補佐に就任したとされる人物エル・ハジ・バブドゥ・トゥーレ（El Hadj Baboudou Touré）こそ，ブアケ管区長官が「決定」したイマーム第1補佐――ただし筆者が確認した史料では「エル・ハジ・バウドゥ・トゥーレ」(El Hadj Baoudou Touré）という綴りである――と同一人物である[30)]。本稿でみてきたとおり，史料に基づけば，この人物の礼拝時には改革派と伝統主義者のいさかいが起こったのであるし，ウフェ＝ボワニが総督に対して激高するということが展開された。史料から確認できた事態の推移とミランの記述には一致しない点もある。

だが，仮にミランの記述が，本稿で見た史料で扱った時期――本稿で見た史料がカバーしているのは1953年9月まで――よりあとに起こったことについて記しているのだと考えれば，本稿での記述とは矛盾しないかもしれない。ミランが記しているのは，ムスリム同士が宗教的な流儀を超えて互いに尊重し，共生しようとする姿である。そののちブアケでこのような光景が展開されたのかどうか，新たな史料の発掘を通して，さらに追求していくこととしたい。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

小川了 2015.『第一次大戦と西アフリカ――フランスに命を捧げた黒人部隊「セネガル歩兵」』刀水書房.

坂井信三 2004.「西アフリカのタリーカと社会変動下の集団編成」赤堀雅幸・東長靖・堀川徹編『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会 pp.205-226.

ヤコノ，グザヴィエ 1998.『フランス植民地帝国の歴史』(平野千果子訳) 白水社.

30）なお，ブアケ管区長官の「決定」で指名されたイマーム第2補佐はエル・ハジ・ベレ・コイタ(El Hadj Belle Koïta）という人物である。

〈外国語文献〉

Alexandre, Pierre 1970. "A West African Islamic Movement: Hamallism in French West Africa." In *Protest and Power in Black Africa*, edited by Robert I. Rotberg and Ali A. Mazrui, New York: Oxford University Press, 497-512.

de Benoit, Joseph Roger 1982. *L'Afrique occidentale française de la Conférence de Brazzaville (1944) à l'indépendance (1960)*. Dakar: Les Nouvelles Editions Africaines.

Beyries, J. 1952. Rapport de mission sur la situation de l'Islam en A.O.F.（3 avril - 31 juillet 1952）.（フランス海外公文書館　1AFFPOL/2158/2収蔵）

Bogolu Adou, Georges 1987 "Le R.D.A. et les religions." In *Rassemblement démocratique africain*, *Actes du colloque international sur l'histoire du R.D.A. Yamoussoukro 18-25 octobre 1986 Tome I: Communications*. Abidjan: CEDA, 319-326.

Cruise O'Brien, Donal B. 1986. "Wails and Whispers: the People's Voice in West African Muslim Politics." In *Political Domination in Africa: Reflections on the Limits of Power*, edited by Patrick Chabal, Cambridge University Press, 71-83.

Daddieh, Cyril K. 2016. *Historical Dictionary of Côte d'Ivoire (he Ivory Coast)*. Third Edition. London: Rowman & Littlefield.

Fofana, Lémassou 2007. *Côte-d'Ivoire: Islam et sociétés. Contribution des musulmans à l'édification de la nation ivoirienne (XIe-XXe siècles).* Abidjan: Les Editions du CERAP.

Hanretta, Sean 2009. *Islam and Social Change in French West Africa: History of an Emancipatory Community*. Cambridge University Press.

Kaba, Lanciné 1974. *The Wahhabiyya: Islamic Reform and Politics in French West Africa.* Evanston, Ill.: Northwestern University Press.

――― 1987. "Les commerçants musulmanes dans l'action politique du R.D.A., 1945-1960 Camion - Cola- Café." In *Rassemblement Démocratique Africain, Actes du colloque international sur l'histoire du R.D.A. Yamoussoukro 18-25 octobre 1986 Tome I: Communications*. Abidjan: CEDA, 312-318.

Kipré, Pierre 1985. *Villes de Côte d'Ivoire 1893-1940. Tome II*. Abidjan- Dakar-Lomé: Les Nouvelles Editions Africaines.

Miran, Marie 2006. *Islam, histoire et modernité en Côte d'Ivoire*. Paris: Karthala.

Schachter Morgenthau, Ruth 1964. *Political Parties in French-Speaking Africa.* Oxford: Clarendon Press.

Thompson, Virginia, and Richard Adloff 1957. *French West Africa*. Stanford: Stanford University Press.

Traoré, A. 1983. *Cheikh Hamahoullah: Homme de foi et de résistance*. Paris: Maisonneuve et Larose.

Zolberg, Aristide R. 1969. *One-Party Government in the Ivory Coast (Revised Edition)*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

本書は「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示-改変禁止4.0国際」の下で提供されています。
https://creativecommons.org/licenses/by-nd/4.0/deed.ja